

「或る女のグリンプス」から「或女」まで

——嗅覚による内面世界の表現の獲得

唐 銘 遠

一、問題の所在

有島武郎「或女」は明治四十四年一月から『白樺』誌上に掲載された「或る女のグリンプス」⁽¹⁾を改稿し、大正八年三月に有島武郎著作集第八輯⁽²⁾として出版された前編と、新たに創作し、同年六月、同著作集第九輯⁽³⁾として刊行された後編によって構成されている。主人公の名の改変の他、その帰朝から破滅までの新たな展開が加わった。

蒲生芳郎が「前後それぞれの執筆時期の作者の思想の方向性をそれぞれに反映する小説であった」⁽⁴⁾、野島秀勝が「葉子が作者自身の「思想史」の肉化という様相を帯び始める」⁽⁵⁾と指摘するように、初稿から「或女」まで見られる有島の思想とその筆致との関連性が非常に高い。

安川定男⁽⁶⁾が論じる通り、「或女」に見られる有島の「思想」の中でも、政治、歴史と文学など諸方面を統括する形而上的思考、人生の意義の有無を問う「人生の可能」に繋がる「本能的生活」⁽⁷⁾が大きな役割を果たしている。当然なことに、その「肉化」の成功に緊密にかかわる葉子の造形、特に〈肉〉、〈本能〉、つまり感官の問題も注目された。外尾登志美は「改稿の際主人公をより肉体的な欲望に忠実な人格」と「利己的な人格にする意図があった」⁽⁷⁾と提示している。さらに、川上美那子は葉子の「感官にしたがって錯乱世界をたどるべく仕組まれたこのテクストの表現構造」と、「後編後半部に現出する狂気の〈不可思議の世界〉」の構築における感官表現の重要性を指摘する。

〈不可思議の世界〉の断片として、紅野謙介が「既視感」⁽⁸⁾とする第七章の葉子の「恍惚」は「鼻の孔が塞がった」から始ま

り、「鼻血」に終わり、嗅覚の不在が見られる。江種満子は十三章の「夢幻」についても「聴覚的の、触覚的の、視覚的の、温度感覚的の諸々のイメージを喚起し」たと、嗅覚以外を指摘している。しかし、〈人生の可能〉をもたらず〈本能〉であるものの、〈不可思議の世界〉からやや距離を置いている嗅覚について作品全体を系統的に考察する必要がある。

嗅覚器官の鼻に焦点をあてる研究も見られるが、その多くは山田昭夫が「内田との断絶による葉子の内面の裂傷」^①と第七章の鼻血について指摘するように、鼻血にとどまっており、具体的な嗅覚表現に対する考察はまだ不十分である。

嗅覚と文学の観点を用いる研究は例えば真銅正宏『匂いと香りの文学誌』^②など、各嗅覚表現を精緻に分析するものもあるが、その分析のあまりの精緻さのため、「記憶」、「身体」か、性急に「嗅覚」の象徴的意味を個別に細かく碎き、狭く縛ることになっている。各嗅覚表現の相互作用は看過されている。

本稿は、初稿から「或女」までの嗅覚表現を一つの系統として詳細に検討するうえで、その有島思想の「肉化」における嗅覚の貢献を確認し、嗅覚と主人公葉子の〈内面〉に覚醒する〈人生の可能〉との強い相関関係を明らかにする。従来の研究では、〈人生の可能〉についての研究は主に終局部に注目が集まり、〈人生の可能〉の有意義説と〈人生の不可能〉の無意義説と大きく二分されている。本論文は新たに全作品を貫く、改稿前後の嗅覚表現の視座から、新たな示唆を提示する。

二、〈香ひ〉と内面の〈渾沌〉

早くも「或る女のグリンプス」の冒頭に最初の嗅覚表現が登場する。

其時、

「若奥様是れをお忘れになりました」

と云ひながら、紺の香のブンとする先刻の車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を左肩に駆けよつて、オリブ色の紺ハンカチに包んだ小さな物を渡さうとすると、

「早く／＼早くしないと出つちまいますよ」

と改札が堪らなくなつて、肝癪声を振り立てた。

（第二巻第一號、五一—五二頁、第一章）

「青年の前で若奥様と呼ばれ」、「針のように鋭い神経」に「すぐあまのじやくに」された田鶴子と、「呼ぶ」の動作主である車夫の羽被から発する紺の「香」の間に明らかな分断が見られる。車夫がもたらす不快感と、同じく車夫から発せられる良い嗅覚感覚が不自然なほど対極に置かれた。田鶴子が自ら感じた車夫のにおいすらも客観社会に定義された「香」と認めざるを得ない。一人の〈個〉として、田鶴子は感受性を以て客観社会を認識し、それに参与しながらも、同時にその感受性とともに客観社会の抑圧に覆われている構造が明確である。この「香」

は田鶴子を快くするどころか、むしろ不快感までも不純にし、純粹、透明なる体験を攪乱する、さらなる不快感を煽り立てるものである。

しかし、「或女」になると、「香」が完全に〈にほひ〉になった。

二人がてんぐに切符を出さうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被の紺の香ひの高くする（つゝ）さつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまま慌てたやうに追駆けて来て、オリブ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く、早くしないと出つちまいますよ」改札が堪らなくなつて疳癪声をふり立てた。

（前編、四頁、第一章）

すでに拙稿^③で明らかにしたように、明治大正期の文学作品にみられる、「紺」など、審美対象の定型ではないものの〈にほひ〉は〈かをり〉と同じく社会の共通認識による〈美〉そのものから嗅覚のみへと収斂した。「香ひ」の場合、〈良い〉とのニュアンスも不安定な表記のみに依存している。社会の共通認識ではなく、その判断は実は個人にしか遡ることができない。

〈香〉ではなく、紺の〈香ひ〉の場合、車夫のにおける優劣は外的なる客観社会ではなく、その「若奥様」と同じく葉子の

判断の元に統一された。したがって、そのにおける良さの絶対性が弱化され、「紺」と「香」の間に生じる違和感と、車夫のもたらした不快感と嗅覚感覚の〈良さ〉の対立がやわらげられた。一方、〈個〉対〈社会〉という葛藤の構造が強化され、事物の両面、いわゆる矛盾そのものが葉子一人の内面に圧縮された。ポール・アンドラが指摘した葉子の「社会から拒絶され」「自分の内部へと」の「下降^④」を、「香ひ」が冒頭からすでに示している。

車夫のにおける好ましいと判断するのも葉子であり、その同じ車夫の呼ぶ「若奥様」を不快と感じるのも同時に葉子である。相容れない対極にある二つの感受と感情が狭い一人の人間の内面で絡み合うことになる。〈不快〉でも好ましさを発見しようとする、植栗彌の論じる「純真な求め・質的上昇の求め」と、好ましい感覚にも〈不快〉がついてくる実感の相互作用によって、植栗の言う「求め」が「向下的」・「破壊的傾向を増強」し、「滅び」を推進する（中略）「悲壮な自己矛盾」の満ちた葉子の内面がようやく紙上に浮かび上がった。

前述のとおり、この内面の「裂傷」として、山田が第七章の鼻血を捉える。葉子にとつての内田の重要性は諸先学においてすでに確固たるものであり、内田家から出た直後の鼻血についても山田の見解に同感である。しかし、その「裂傷」の礎石について検討するには、改稿によつて新たに内田の細君に加えられた嗅覚描写が注目値する。

初稿

内田の細君は自分より遙か年下の葉子の言葉をしみぐと聞いてゐるらしかった。葉子は葉子でしみぐと細君の身なりを見ないではゐられなかつた。一昨日あたり結つたまゝの束髪だつた。癖のない濃い髪には薪の灰らしい灰がたかつてゐた。糊気のぬけ切つた単衣も物淋しかつた。その柄の細かい所には里の母の着古しといふやうな香ひがした。

(前編、六五頁、第七章)

内田の妻君は遙か年下の田鶴子の言葉を、しみぐと聞いてうなづいて居た。
(第二卷第六號、六頁、第七章)

より、内田の細君の動作に「らしかった」が加わり、語り手が葉子から独立する外的な第三者から、葉子の内面世界に近寄る視座になった。その直後に大幅に加筆される「身なり」についての描写は明らかに「見ないではゐられなかつた」と、視覚表現と予告されているが、「柄の細い所に」「香ひがした」。視覚で感じられる柄から嗅覚によつて感じられる「香ひ」が一種のメタファーとも捉えられる共感覺的表現として登場する。

それまで視覚によつて「他人の事」のように描かれてきたが、「物淋しかつた」と、冷静な觀察の姿勢が崩れ、「単衣」に注目し、感情が触発される。そして、その「単衣」に引き込まれた

かのように、高次的な視覚は低次的な嗅覚に退行し、「柄」ではなく、そのなつかしさと「憐れ」がより肉体的な感覺として感じられる。

「自分の事のやうに歯痒」く、「輕蔑の影が」「浮かび上るの」を「如何する事も出来なかつた」相手ではあるが、葉子もやはりその「憐れ」を見出し、ついつい「考へてゐられやしない」「他人の事」を考へてしまふ。その「憐れ」の中心にあるのはやはり「里の母」との類似性である。

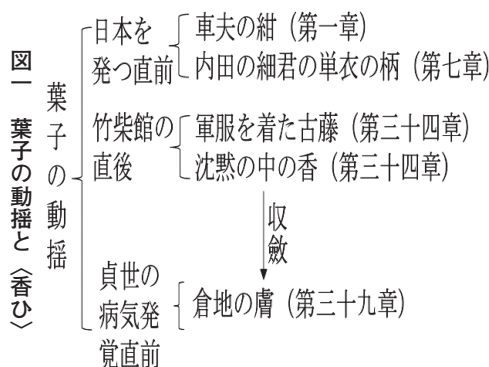
誰に対してもすぐ「同情を求め」、「無意味な涙を流」す、「憐れ」な細君は〈香ひ〉によつて一般化され、「憐れ」な「里の母」像に抽象される。「自分より遙か年下の葉子の言葉」も「しみぐ」と聞いてゐるらしかった」ように、年齢や階級などを超越し、その「里の母」の型は葉子にとつてもさほど遠くないものである。

江種がこの後鼻血に至るまでの経過を「夢幻」とし、そこに現れる母親の幻像と、それに次ぐ紙屋の少女に触発される定子の幻像と関連付けて母性愛と肉体の關係を指摘している。しかし、その「夢幻」の前触れとして、母性愛問題はすでに葉子に襲つてきたことが〈香ひ〉によつて明らかである。「理性の退行した瞬間」の始まる前には、「屈辱」を感じてもなお「憐れ」を見出そうとする〈香ひ〉が先陣を切る。

「夢幻」まで至っていないが、共感覺的表現のこの〈香ひ〉はまず葉子の感官の中でも視覚と嗅覚の境を朦朧にした。アン

ドラの提示した「曖昧なのではない」「渾沌状態」へ導き、「意図して境界線を打ち砕く役割を、この〈香ひ〉が果たした。」「内面の裂傷」はまさにその「香ひ」によって開かれた内面世界の「渾沌状態」に基づいてようやく可能になる。

初稿に一例もないこの〈良い〉との判断を包括する「香ひ」は「或女」後編にも三例が確認できる。古藤の「皮類の腐つたやうな香ひ」（後編、一七〇頁、第三十四章）から気まずい沈黙の対照となるお香の「香ひ」（同、一七六頁、第三十四章）と次節で詳述する倉地の「膚の香ひ」（同、二五三頁、第



三十九章）まで、前編と同じく、〈clear〉、〈sun-clear〉にしない、できないという、〈生〉の様態に対して葉子に激しい動揺が訪れる前奏として、「香ひ」は常に秘かに漂ってくる。

前後編を貫いて存在するこれらの〈香ひ〉によって、〈渾沌〉たる内面世界が構築され、あの有名な自筆広告文の〈冒険〉の舞台が出来上がる。

三、倉地にまつわる嗅覚変化と奪い合う愛の〈敗れ

「アダム倉地にめぐり逢うまでは「峠」際で揺れ動いていたイヴ葉子であったが、彼を得たことによって葉子は決定的に時間の「世の中」を飛び越えてしまった」と、石丸晶子は葉子の〈冒険〉にとつての、葉子の倉地認識の重要性を指摘している。川上も「一三章、葉子の運命の転回点を暗示する幻覚に」、「赤い衣という罪」を伴う「肉体」の相手が「しだいに倉地へと収斂してくる」と提示しているように、〈冒険〉の行き先は、葉子に映る倉地に関わっている。

能動的に拒否できる感覚ではないものの、主人公は出会う当初ではなく、「遠ざからうとして」なお「すり抜けて先きに立」たれた後に「狭い階子段」でようやく倉地に対する初の嗅覚を感じた。

何か芳醇な酒の（さけ）しみと葉巻煙草との匂が、この男個有の膚の匂で、もあるやうに強く葉子の鼻をかすめた。

(前編、一〇六頁、⁽²⁰⁾第十章)

陸でのすべてという従来の〈世の中〉から遮断され、空間環境はしっかりと狭く暗い「階子段」に収斂された。「かすめた」強い力への防備かのように、「芳醇」な「酒」と「葉巻煙草」ではあるが、「この男個有の膚」と連想させるため、このにおいては〈香〉ではなく、ニュートラルな〈匂〉にとどまっている。

しかし、それが再び「かすめた」時には、

横濱で倉地の後に続いて船室への階子段を下る時始めて嗅ぎ覚えたウキスキーと葉巻とのまじり合つたやうな甘たるい一種の香が、この時幽かに葉子の鼻をかすめたと思つた。それを嗅ぐと葉子は情熱のはむらが一時に煽り立てられて、人前では考へられもせぬやうな思ひが、旋風の如く頭の中をこそいで通るのを覚えた。

(前編、一九八—一九九頁、⁽²¹⁾第十七章)

同じ酒と葉巻のにおいはすでに〈香〉と認識され、「情熱のはむら」を「煽り立て」た。このにおいと倉地の膚との関係性は略されてこそ、葉子はこの野性的な力を「男」と認識して抵抗どころか、むしろ情熱という生命力の刺激元と認識し始める。まだ「畦」に在る葉子ではあるが、内面がすでに〈本能〉に傾いていく姿勢が嗅覚の変化から明らかである。

そして、後編の冒頭に、葉子がようやく倉地そのもののおいを認識しようとし、

倉地は手早く顔を洗つて部屋に帰つて来た。而して制服に着かへ始めた。葉子はいそ／＼とそれを手伝つた。倉地特有な西洋風に甘つたるいやうな一種の匂ひがその体にも服にもまつはつてゐた。それが不思議に何時でも葉子の心をときめかした。

(後編、四頁、第二十二章)

自らの心を「ときめかした」のは酒や葉巻ではなく、倉地そのものであることに、横浜で目が覚めた朝に葉子は気づいた。ただし、それはまだ〈匂ひ〉とニュートラルなものに過ぎない。「甘い誘惑とともに、「たるい」という耽溺の危険も待ち構えている不安も看過できない。

ところが、双鶴館で葉子が「皆んな捨てて、皆んな忘れる」「その代わり倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせ」と、有島がいう「二倍の恵みを得る」⁽²²⁾愛である〈奪ひ合う〉ことを決心した後、とうとう倉地の〈香〉は登場する。

そこに脱ぎ捨て、ある倉地の普段着は益々葉子の想像を掻きまぜさせた。いつでも葉子の情熱を引摺んでゆすぶり立てるやうな倉地特有な膚の香、芳醇な酒や煙草から香ひ出るやうなその香を葉子は衣類をかき寄せて、それに顔を埋

めながら、癡痺して行くやうな気持で嗅ぎに嗅いだ。その香の一番奥に、中年の男に特有なマッふけのやうな不快な香、他人の、であつたなら葉子は一たまりもなく鼻を掩ふやうな不快な香を嗅ぎつけると、葉子は肉体的にも一種の陶酔を感じて来るのだつた。その倉地が妻や娘達に取捲かれて楽しく一夕を過してゐる。さう思ふとあり合せるものを取つて打毀すか、掴んで引き裂きたいやうな衝動が訳もなく嵩じて来るのだつた。(後編、六三頁、第二十六章)

「酒」や「煙草」は相変わらず「香」であるが、倉地の「香」の飾りに退行した。主観意思にもよる「香ひ」でもなく、倉地の膚のにおい、「不快」な「ふけ」までも、葉子にとってはまぎれもなく「香」である。「世の中」から切り離され、二人のみの世界に耽る葉子には、倉地のにおいを良いと判断する主観がこの二人きりの世界の客観でもある。奪い合うことによる両極を統一する「一体化」の「調和」願望が葉子の内面で高まっている。

何とはなしに倉地に甘えたいやうな、詫びたいやうな気持ちでマッそつと襖を明けて見ると、あの強烈な倉地の膚の香が暖かい空気に満たされて鼻をかすめて来た。葉子は我れにもなく駆けよつて、仰向けに熟睡してゐる倉地の上に羽がひののしか、つた。(後編、八二頁、第二十七章)

倉地の「香」は二人が引越した後も少しは続いたが、葉子が双鶴館の女将の幻像を見た後になると、

部屋の中には案外にも倉地はゐなかつた。隅から隅まで片付いてゐて、倉地のあの強烈な膚の香ひも更に残つてはゐなかつた。葉子は思はずふらくとよろけて、泣きやんで、部屋の中に倒れこみながらあたりを見回した。居るに違ひないと独り決めをした自分の妄想が破れたと云ふ氣は少しも起らないで、確かにゐたものが突然溶けてしまふか如何かしたやうな氣味の悪い不思議さに襲はれた。

(後編、二五三―二五四頁、第三十九章)

「確かにゐたものが突然溶けてしまふか」と、「香」が「香ひ」となり、主観と客観をはじめとする両極の「調和」の夢は破滅の兆しを示した。しかし葉子の「敗れ」はここにとどまることがない。

倉地の胸からは触れ慣れた衣ざはり、強烈な膚の匂ひとが、葉子の病的に嵩じた感覚を乱酔さす程に伝はつて来た。(後編、二九六―二九七頁、第四十二章)

「つらく当」という、葉子の残酷な迷信の犠牲になった貞世の病氣の影の下で、「なつかし」くても、倉地のおいは「匂ひ」

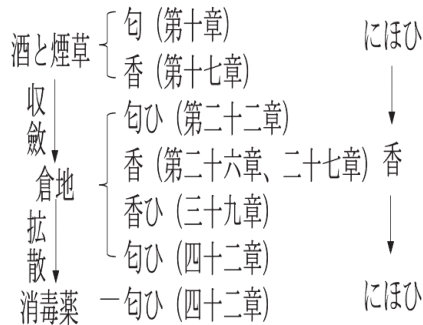
応接室まで来て上つ張りを脱ぐと、看護婦が噴霧器を持つて来て倉地の身のまわりに消毒薬を振りかけた。その幽かな匂ひがやうやく葉子をさへはつきりした意識に返らした。葉子の健康が一日々と云はず、一時間毎にもどろろ弱つて行くのが身に沁みて知れるにつけて、倉地の何所にも非点のないやうな頑丈な五体にも心にも、葉子は遣り所のないひがみと憎しみを感じた。

倉地のにおいが完全に消毒薬の「匂ひ」に覆われる。葉子の関心は倉地から「生命」を支える肉体の存続状態に移り、「弱つて行く」葉子の健康と、「何所にも非点のないやうな頑丈な」倉地との対立を際立てる消毒薬の「匂ひ」によつて、奪ひ合うという「本能的」な愛における葉子の敗れが告げられる。

このように、石丸の指摘する、「甚だ的確な本能的な生活者葉子の内的姿」の發展と倉地と愛という、「人生の可能」を求めゐる冒険の一段階における敗れの輪郭が、倉地のおいによつて鮮明に描かれている。

倉地との奪い合う愛における葉子の敗れに對して、その敗れを包括する、〈冒險〉そのもの、特にその最終目的に置かれてゐる〈人生の可能〉の覺醒についてなお検討する必要がある。まず注目すべきは改稿による前編の臭氣の消失である。

図二 倉地にまつわる嗅覚変化



— 123 —

立つ臭や、畳の上に踏みにぢられたまゝ、こびりついて居る飯粒などが、直ぐ田鶴子の神経をいら／＼させた。

(第二卷第六號、二頁、第七章)

ていた船室のにおいについて、初稿では

朝から神経はひどく興奮して沈滞した船室^{ケビン}の内の空氣が臭氣苦しく感ぜられる。

(第二卷第十一號、八三頁、第十一章)

《臭》という名詞によつて、ネガティブなニュアンスがに自體にしみ込み、主人公の否定的認識が事物の本質に及んでゐる。田鶴子にとつて、「襦袢」の《臭》が主観判断の介入する必要もないほど確かであり、それが「飯粒」とともに「神経をいら／＼させた」のも当然のことである。

「或女（前編）」の当該箇所には大きな變動が見られないが、問題の嗅覚表現が精緻に改められている。

白痴の児が赤坊同様なので、東の縁に干してある襦袢から立つ塩臭い匂や、畳の上に踏みにぢられたまゝこびりついてゐる飯粒などが、すぐ葉子の神経をいら／＼させた。

(前編、五八―五九頁、第七章)

名詞《臭》はより複合的な「塩臭い匂」になった。不快をもたらす嗅覚感覚である事実は変わらないが、不快さが形容詞に収斂することによつて、生命の生息する外的環境の一部として、においの本質がニュートラルな客観存在と捉えられるようになった。

同様に、絵島丸が横浜を發つてから、葉子が三日間とじこもつ

《臭氣》苦しくと、「朝から」「ひどく興奮」する「神経」が参照物としてあるために、さらに「沈滞」が際立つ。船室の空氣を、「苦しく」させる一種の《臭氣》とする初稿の意図が明らかである。

葉子の神経は朝からひどく昂奮してゐた。ステイムで存分に暖まつて來た船室の中の空氣は息氣苦しい程だつた。

(前編、一一八頁、第十一章)

「或女（前編）」では、その嗅覚感覚が取り除かれた。「停滞」した空氣もまた「ステイムで存分に暖まつて來た」と、新しい展開の芽生える前の、生命の發生を促す力を十分に込めた曖昧な熱量に変身した。狭い船室の中の葉子を囲んだのは、《臭氣》ではなく、「息苦しい」ほど「暖まつた空氣である」。

《臭氣》からニュートラルなにおいと空氣へ、「醜」と「邪」を相対的なものとして凝視し、その「底に」宿っている「人生の可能」に対する求めという傾向性が構築された。ところが、

改稿後の前編に一例もない〈臭氣〉が、後編の貞世の病室に登場し、〈人生の可能〉を信じて求める葉子の内面の亀裂を示した。

すっかり充血したその眼は普段よりも大きくなつて、二重睫になつてゐた。その眸は熱の為に燃えて、おど／＼と何者かを見詰めてゐるやうにも、何かを見出さうとして尋ねあぐんでゐるやうにも見えた。その様子は例へば葉子を見入つてゐる時でも、葉子を貫いて葉子の後の方遙かの所にある或る者を見極めようとあらん限りの力を尽してゐるやうだつた。唇は上下ともから／＼になつて、内紫といふ柑類の実をむいて天日に干したやうに乾いてゐた。それを見るもいた／＼しかつた。その唇の中から高熱の為に一種の臭氣が呼吸の度毎に吐き出される、その臭氣が唇の著しいゆがめ方のために、眼に見えるやうだつた。貞世は葉子に注意されて物憎げに少し眼をそらして倉地と岡とのゐる方を見たが、それが如何したんだといふやうに、少しの興味も見せずに又葉子を見入りながらせつせと肩をゆすつて苦しげな呼吸をつゞけた。

(後編、三〇〇頁、第四十二章)

まだ生きていながらも、生と死の界限をさまよう貞世の眼は、「何者かを見つめてゐるやうにも、何かを見出さうとして尋ねあぐんでゐるやうにも見え」、「葉子を貫いて葉子の後ろの方遙

かの所にある或る者を見極めようと」「力を尽くしてゐるやうだつた」。その前後の不気味なうわごとまた生の国の住民である葉子には不思議である。「見るもいた／＼しかつた」唇の「著しいゆがめ方」、つまり生と死の間の苦痛のために、〈臭氣〉が内田の細君の〈香ひ〉と同じにして正反対に、「眼に見えるやうだつた」。

視覚と嗅覚、健康と罹病、生と死、可能と不可能、すべての〈境界線〉が再び共感覚表現によつて打碎かれる。嗅覚である「臭氣」はより高次的な視覚によつて感じられ、肉体発の〈死〉に対する恐怖は次第に論理的思考にも蔓延し、知の完全性をも侵蝕してしまう。

それまで倉地に託されていた、奪い合う愛の形をとる〈人生の可能〉も形を失い、不明瞭に戻る。死病にかかった、愛する貞世と、頑丈であつても連日不在であつた、愛した倉地、という強烈な対照の前にする葉子によつて、〈臭氣〉はそれまで求めていた〈人生の可能〉に対する失望の具象として感じられる。この「臭氣」を感じる葉子は野島の指摘する「本能的生活」の虚妄をも見とつてしまつて、「人生の不可能を感じていた」ことは確かである。拙稿でも葉子渡米前横浜の運河の「香」と加治木病院への入院直後に感じられる運河の「泥臭い」によつて同様の傾向がうかがえる。しかし、野島が葉子の「末期の眼」とする、加治木病院の外の「青空」と「あからさまな景色」の直前に花の〈香〉がなお感じられる。

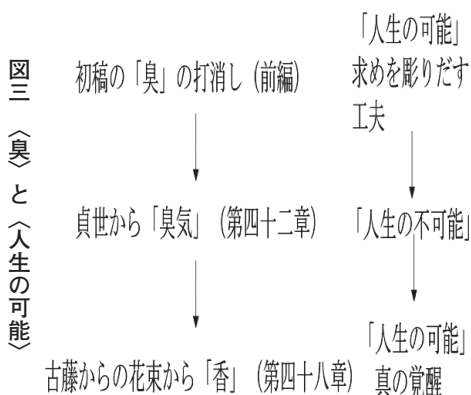
葉子は昨日までの疲労と衰弱とに似ず、その日は起きるから黙つて臥てはゐられない位、体が動かしなかつた。働かず度毎に襲つて来る腹部の鈍痛や頭の混乱をいやが上にも募らして、思ひ存分の苦痛を味はつて見たいやうな捨鉢な気分になつてゐた。而してふら／＼と少しよろけながら、衣紋も乱したまゝ、部屋の中を片付けようとして床の間の所に行つた。懸軸もない床の間の片隅には昨日古藤が持つて来た花が、暑さの為に蒸れたやうに萎みかけて、甘つた香を放つてうなだれてゐた。葉子はガラス瓶ごとそれを持つて縁側の所に出た。而してその花の「死」かたまりの中に無図と熱した手を突込んだ。死屍から来るやうな冷たさが葉子の手に伝はつた。

(後編、三六七—三三八頁、第四十八章)

鳥居明久は「古藤の花束と手紙は葉子に「死」を見せるのだ」と、この「甘つた香を放つて」いた花束と葉子の見た「死」の関連性を示している。ところが、古藤の手紙を、葉子は最初から「一種の侮蔑するやうな無感情を以て」聞いており、倉地の外妾の報道も「軽くばかり思つてしまつた」と、さほど激しい反応を見せなかつた。その無関心から一変して、葉子が「心の影と戦はうとしていた」直前に、つやがちやうどその花束を「ガラス瓶に活け」た。手紙ではなく、「活」きている花束と葉子の見た「死」の関連性が強いことが明らかである。

「昨日の疲労と衰弱とに似ず、体が動かしなかつた」葉子は、その「死」を見せた花束からかつて倉地から感じたやうな、「甘つたらい」においを再び感じるることによって、新たな形をとる「人生の可能」に対する求めも一種の無意識的記憶として蘇ってくる。

ましてそれは今回「香」へエスカレートしたのである。「死屍」同然の水に「活」きている花であるが、かえつて「死屍」のやうな「冷たさ」に反する「暑さの為に蒸れたやうに萎みかけ」る。「甘つたらい」(「香」)は「死」に供養されながらもそれに抵



抗しつつ〈生〉の灼熱に虐げられてこそ放たれる。

倉地の〈香〉から見る主観判断と客観世界という両極の〈調和〉ではなく、葉子は〈生〉と〈死〉のような対極の間に愛子の〈柔順〉とは正反対に〈勝気〉に徘徊する状態そのものを〈香〉、つまり真の〈人生の可能〉と悟る。

その後葉子は花を「投げ捨て」、ガラス瓶も「敲きつけた」。(死)を見せる花とガラス瓶の対を破壊する「殆んど無意識」に「任せ」ることによって、最後までも〈死〉へ抵抗し続ける〈生〉の宣言をし、真の可能の〈香〉を求める。

同時に、花とガラス瓶の次元では、〈生〉と〈死〉の間の苦戦を徹底した花に、葉子の「投げ捨て」という定めが賜られた。自己放棄ではなく、最後までも受身で戦い続ける花はその褒美として死屍同様な水から「引拔」かれた。限界の象徴であるガラス瓶の崩壊と〈死〉屍同然の水の消散ともによりやく〈無限〉が訪れた。この〈無限〉こそが真の〈人生の可能〉の彼方である。鳥居が「古藤は四十七章において葉子に〈死〉を見せ、葉子を真の覚醒へといざなう」と指摘した通り、〈人生の不可能〉ではなく、古藤から送られてきた花束の〈香〉によって真の〈人生の可能〉が葉子の内面に覚醒することがこの〈香〉によって明白に伝わっている。

五、おわりに

「或る女のグリンプス」から「或女」の成立まで、嗅覚表現

がより系統的に組織された。

〈香ひ〉という相対性の強い嗅覚表現が矛盾の両極を狭い葉子の内面へと極限まで圧縮し、矛盾の激しさを増している。同時に、すべての境界線が打砕かれ、葉子の渾沌なる内面世界が〈冒険〉の舞台として構築される。

〈にほひ〉から〈香〉へ、また〈にほひ〉へ戻る構造によって、倉地にまつわる嗅覚表現は〈冒険〉の中の最も険しく大胆な試み、つまり倉地との愛の高揚と退潮の指標として大きな役割を果たした。

前編における臭気承認を拒否する傾向から、病床に倒れた貞世から感じる〈臭気〉へ、また〈死〉を見せる花束から再び感じる〈香〉へ回帰する、嗅覚感覚に対する葉子の価値判断の変化が明らかである。それは同時に〈人生の可能〉に対する求めから失望を経てようやく〈真の覚醒〉を迎える伏流として機能している。終局における葉子が感じたのは〈人生の不可能〉ではなく、〈生〉と〈死〉の間さえも調和を望まない究極の〈流浪〉の形をとる〈人生の可能〉である。

内面世界における嗅覚の役割は同時にその反面の嗅覚の不在を研究する可能性も示した。嗅覚が、「nullifies (中略) the barriers of time and space」つまり「時間と空間をさえ撥無する」(不可思議の世界)を解明する鍵となることが期待できる。

そして、感官感覚、特に嗅覚と〈不可思議の世界〉における時間の揺れ、つまり身体と記憶の関連性も、他の作品も含む、

有島全体におけるカントとベルグソン受容を解説する新しいアプローチの可能性を示している。

注

- (1) 『白樺』(洛陽堂、明治四十四年一月(第二卷第一號)～大正二年三月(第四卷第三號))。本稿では全ての引用本文に対し、一部本文を私に通行字体に改めた。本文横の傍線は稿者による。以下同。
- (2) 有島武郎『或女(前編)』(叢文閣、大正八年三月)。
- (3) 有島武郎『或女(後編)』(叢文閣、大正八年六月)。
- (4) 蒲生芳郎『「或る女」論——「或る女のグリンプス」と「或る女」後編の關係——』『基督教文化研究所研究年報』(第9-10号、宮城学院女子大学、昭和五十二年三月)。
- (5) 野島秀勝『詩への逸脱——有島武郎論(最終回)——』『文学界』(19卷3号、文芸春秋、昭和四十年三月)。
- (6) 安川定男『第二部 作品論——「或る女」と「星座」——』5『有島武郎論(増補版)』(明治書院、昭和四十二年十一月初版、昭和五十三年五月増補版)。
- (7) 外尾登志美『「或る女」のわかりにくさ(一)——前、後編の主人公の人格のずれ——』『有島武郎——個性——から「社会」へ——』(右文書院、平成九年四月)。
- (8) 川上美那子『4暗喩としての「或る女」』『有島武郎と同時代文学』(審美社、平成五年十二月)。
- (9) 紅野謙介『「或る女」第七章の検討——既視感のイメージその他——』

紅野敏郎編『有島武郎「或る女」を読む』(青英社、昭和五十五年十月)。

- (10) 江種満子『「或る女」論——「夢幻」と「屈辱」をめぐる——』『日本近代文学』(第5集、日本近代文学会、昭和四十一年十一月)。
- (11) 山田昭夫『Ⅱ その作品』『有島武郎の世界』(北海道新聞社、昭和五十三年十一月)。
- (12) 真銅正宏『匂いと香りの文学誌』(春陽堂ライブラリー、春陽堂書店、二〇一九・十)。
- (13) 唐銘遠『明治大正期日本作家の嗅覚表現——香(には)ひ——を通して』『青山語文』(50、青山学院大学日本文学会、令和二年三月)。
- (14) ポール・アンドラ『第三章 都会と海』『異質の世界 有島武郎論』(荒このみ・植松みどり訳、冬樹社、昭和五十七年一月。初出は、Anderer, Paul James. Other worlds : a study of Arishima Takeo (Yale University, Ph. D, 1979).)。
- (15) 植栗彌『第8章「或る女」研究(四)——葉子とキリスト教との關係——』『有島武郎研究——「或る女」まで——』(有精堂、平成二年三月)。
- (16) 江種注(10) 論文。
- (17) アンドラ注(14) 書。「序章」。
- (18) 石丸晶子『「或る女」論』『国語と国文学』(50巻7号、東京大学国語国文学会、昭和四十八年七月)。
- (19) 川上注(8) 書。「2 「或る女」について(一)」。
- (20) 引用した「或女」の該当箇所の嗅覚表現は「或る女のグリンプ

ス」との間に大きな変更は確認されなかった。

(21) 同注 (20)。

(22) 有島武郎『惜しみなく愛は奪ふ』(有島武郎著作集第十一輯、叢文閣、大正九年六月発行、大正九年十二月第卅六版)。

(23) 石丸注 (18) 論文。

(24) 野島注 (5) 論文。

(25) 唐銘遠「或る女」と明治の京浜の嗅覚：「環境」、「嗅覚」、「近代化」と「生命」(『緑岡詞林』46、青山学院大学日文院生部会、令和四年三月)。

(26) 鳥居明久「或る女」後編における「古藤」——終局部をめぐって——『日本近代文学』(第26集、日本近代文学会、昭和五十四年十月)。

(27) TAKEO ARISHIMA 「To Die is Gain」佐々木靖章編著『資料有島武郎著作目録・著作解題 全集逸文周辺資料』(萬葉堂、昭和五十三年五月。初出は「LOVE THE PLUNDERER THE METAPHYSICS OF A MODERN JAPANESE」『新東洋』(第壹卷第參號、大正六年八月一日))。

(28) 有島注 (22) 書。

(とう・めいえん／本学大学院博士後期課程)